

[原著論文]

児童養護施設における体づくり運動に注目したグループワークの試み ー安心感の形成に向けてー

高橋 佳代*

要 旨

本研究の目的は、児童養護施設におけるグループワークについて検討することである。平成22年から月に1回「体操教室」と題し、幼児から小学6年生までを対象に、体づくり運動に注目したグループワークを行った。プログラム内容は、体を動かす楽しさや心地よさを味わう体ほぐし運動と心身の多様な動きをつくる運動遊びを中心に、コミュニケーションワーク等を取り入れた。プログラムの実践は、本学の保健体育科の教員を目指す学生を中心に行われた。グループにおける参加者の体験について検討し、児童養護施設におけるグループワークの意義と留意点が考察された。

キーワード：児童養護施設、グループワーク、体づくり運動

Group work using mind-body exercises to establish mutual trust among children living in residential care settings

Kayo TAKAHASHI*

Abstract

Group work using mind-body exercises named the “exercise class” has been conducted once a month at a group home. Participants were infants to sixth grade students. The program included exercises for physical release; through which participants could enjoy moving their body and feeling comfortable, exercise play; through which participants could create various mind-body movements; and communication work, among others. Mainly university students, who were studying to become physical education teachers, conducted the program. The experiences of the participants were examined, and the significance, as well as problems related to conducting group work at foster homes is discussed.

KEY WORDS : residential care, group work, body building exercise

I 問題と目的

児童養護施設とは、虐待や両親の死亡等で家庭での養育が困難になった2歳から18歳までの児童を養護する施設である。厚生労働省（2013）によると、平成25年10月時点で全国に児童養護施設は595カ所設置されており、28,831人の子ども達が共同で生活をしている。そのうち、虐待を受けた子どもは53.4%、何らかの障害を持つ子どもが23.4%と増えており、専門的なケアの必要性が増している。

現在の社会的養護の方向性としては、子どもをできる限り家庭的な環境で安定的な人間関係の中で育てるため、施設の小規模化やグループホーム化などを推進している。しかし現在でも、社会的養護児の主要な措置先は2歳から18歳未満を幅広く受け入れている児童養護施設であり、さらにその約7割は、20名以上の児童が生活を共にする大舎制の施設である（厚生労働省、2013）。即ち、社会的養護の主な受け皿である児童養護施設は集団処遇体制であり、個別指導が必要な児童や虐待を受け生活技術が身に付いていない児童らも集団生活を送る必要がある。「児童養護施設における処遇困難児等の対応に関する実態調査報告（浜田、2003）」によると、調査対象となった施設の82.4%が「処遇困難な児童は増加した」と回答している。具体的に処遇困難とを感じる場面の最上位の回答は「他児への波及による集団の混乱」であった。また、鎌田ら（2008）の調査においても、児童養護施設職員が感じる集団処遇に関する困難感として「集団で被虐待児をみる難しさ」や「集団の相互作用によって起こる困難さ」が指摘されている。つまり施設においては、処遇困難な事例が増加しており、さらに、子ども同士の相互作用により施設集団全体が不安定になっている状況があるといえる。

施設で暮らす子どもにとって、子ども同士で関わる時間は職員と関わる時間に比べ圧倒的に長い。子ども同士の関わりにより、互いに安らぎを与えあうこともあるだろう。しかし、入所児はその生育歴ゆえに対人葛藤を生じやすい。よって、子ども同士で衝突したり緊張感を持ったりすることも少なくないだろう。それゆえ、大人との信頼関係はもちろんであるが、その上で子ども同士が互いに安心感や信頼感を持てる関係作りへの支援は重要である。

近年、施設において集団を対象にした支援の取り組みが報告されている。森田ら（2003）は施設の思春期児童を対象に自己表現を促すグループワークを検討

し、飛永（2009）は同じく思春期の入所児を対象に動作法を用いたグループアプローチを検討した。また、村澤・木村（2011）は小学生を対象に構造化されたグループワークを行った。さらに、山根・中植（2013）は性問題行動のある入所児に対し集団心理療法を行いその効果について検討した。これらの報告からは、集団を対象にした支援が、施設中の人間関係に対する理解や介入に関して有効であることが示されている。その一方で、集団支援は集団場面であるがゆえの困難性があることも指摘されている。そうであるので、集団そのものを扱い、子ども同士の関わりあいを支援する実践的検討が、様々な視点から必要である。

そこで本研究では、施設における入所児同士の相互信頼感の形成を目指した支援の試みとして、施設入所の幼児から小学生までを対象に、体づくり運動を中心としたグループワークを行った取り組みについて検討する。体づくり運動とは、「体を動かす楽しさや心地よさを味わうとともに、身体の基本的な動きができるようにする運動（文部科学省、2008）」であり、学校体育において平成10年学習資料要領改訂に伴い導入された運動領域である。この領域はそれまで「体操」という領域であったが、心と体をより一体としてとらえる観点から名称を変更し、運動が嫌いだったり不得手な児童生徒への配慮も明確となり、全ての人が楽しく運動を実践できる能力を高めることを目的としている（文部科学省、2013）。体づくり運動は、「体ほぐしの運動」と「多様な動きをつくる運動」で構成されている。「体ほぐしの運動」とは手軽な運動や律動的な運動を行い、体を動かす楽しさや心地よさを味わうことによって、自分の体の状態に気づき、体の調子を整えたり仲間と豊かに交流したりすることができることをねらいとして行われるものであり、「多様な動きをつくる運動」とは体のバランスをとったり移動をしたりする動きや用具を操作したり力試しをしたりする動きを意図的にはぐくむ運動を通して、体の基本的な動きを総合的に身に付けるとともに、それらを組み合わせた動きを身に付けることをねらいとして行う運動である（文部科学省、2008）。平成10年学習指導要領では、高学年のみの領域として取り上げられていたが、子ども達の長期的な体力低下傾向が深刻なことを背景に、平成20年の改訂では小学校第1学年から体づくり運動が位置づけられることになった。低学年においては特に、のびのびと体を動かす楽しさや心地よさを味わうことが強調されている。

児童期は心身の成長が急速な時期である。この時期

に多くの運動器官を動かしながら、体のバランスをとったり、力の入れ具合を調整したりするなど様々な動きを習得することは不可欠である。さらに前述したように児童養護施設には虐待を受けた児童や障害を有する児童など他者との関わりが難しい児童が増加している。児童養護施設で暮らす子どもにとって、のびのびと体を動かす楽しさや心地よさを感じながら、楽しく安全な形で他者との身体的なかかわり合いの体験を持つことは、対人関係の発達を促進する上で重要であると考えられる。また、さらに、児童養護施設が2歳から18歳という幅広い年齢集団で暮らしていることを考えると、幼児のうちから、主体的に体を動かす身体活動の積み重ねは、その後の児童期青年期の対人関係や主体性の発達に影響すると考えられる。

よって、本研究では、児童養護施設の幼児から小学生までの児童を対象に行った体づくり運動に注目したグループワークの取り組み内容について検討する。グループワークの成果と課題を検討することにより、児童養護施設におけるグループワークの意義や有効性、留意点について考察したい。

II. グループワークの概要

1. グループの目的

- (1) 集団場面で安心して自分らしくいられる体験を持つこと
- (2) グループで他者と協力する体験を持つこと
- (3) グループで自己表現しそれを他者に受け入れられる体験を持つこと

以上3つの目標を通して、児童同士の相互信頼感や安心感の形成をねらった。

2. 対象施設の概要

対象となったA児童養護施設は定員60名の大舎制施設である。

3. グループ対象者

A児童養護施設に入所する幼児から小学生まで約40名程度。施設職員から子どもに呼びかけてもらい、参加希望者が参加をする自由参加スタイルとした。幼児と小学生は別室で別のプログラムを行ったが、プログラムの内容によっては合同で行うこともあった。

4. サポーター

筆者の他、九州共立大学のスポーツ学部および経済

学部の教職課程を履修する学生が毎回10名程度参加した。保健体育科の教員を目指す学生らがリーダーとコ・リーダーを担当してグループワークを進行した。プログラムは小学校の保健体育科学習指導要領を参考にしながら筆者と学生サポーターによって作成された。また、施設職員もオブザーバーとして参加し、プログラム内容によっては子どもと一緒に活動に参加してもらった。

5. 時期・頻度・時間

2012年3月から月に1回、平日夕食後の19時から20時までに行っている。翌日の予定への影響等を考え、なるべく金曜日の夜に行うよう設定した。本研究では2014年4月から2014年12までの9セッションを対象期間とし検討した。

6. グループセッションの内容

グループは施設内の居住棟とは別棟にある多目的ホールで行った。基本的なプログラムの流れは以下のとおりである。

(1) 導入と体操 (10分)

セッションの時間前に施設の館内放送で「体操教室が始まること」をアナウンスしてもらった。セッションの時間になったら、リーダー役から開始が告げられ、当日来ている学生スタッフの自己紹介などが簡単に行われた。その後、リーダーのかけ声で大きな声を出して体操を行った。

(2) 体づくり運動に注目したプログラム (小学生：40分、幼児：25分)

前半に体ほぐしの運動を行い、その後多様な動きをつくる運動を行った。体を大きく動かす遊びや他者と協力する遊びを取り入れ、後半は器械体操など2～3のゲームや運動を行った。学生サポーターも子どもと一緒にプログラムに参加した。

(3) 振り返りと次回グループの案内 (5分)

プログラムの終了時には、グループの感想を発表してもらい次回の予告を行った。

7. グループのルール

グループの前に「みんなで協力して楽しい時間を過ごす」ために以下のルールを守るようにリーダーから毎回確認した。

- (1) 叩いたり蹴ったりしないこと
- (2) リーダーの話をよく聞くこと
- (3) 人が発表する時にはよく聞くこと

約束事は、具体的な行動指標として伝えた。例えば、「笛が1回なったらやっていることをやめること」「笛が3回鳴ったらリーダーが話しをするから聞くこと」「笛が2回なったらはじめの隊形に集まること」など具体的に分かりやすく提示した。

8. グループ体験に関するアンケート

参加者と施設職員の体験を検討するため、参加した小学生と施設職員を対象にグループ活動に関するアンケートを行った。小学生に対するアンケートは、グループでの体験を問うものであり、グループ活動に対して「楽しかった」「すっきりした」「イライラした」「わくわくした」「人と協力できた」「体の動かし方が分かった」「皆に注目された」「安心して参加できた」「また体操教室をしたい」の9項目の質問項目を「あてはまらない」から「とてもあてはまる」の四件法で問い、さらに自由記述で感想を求めた。施設職員に対しては、子どもにとってのグループ体験を問うものであり、グループ活動に対して「自己表現の場になっていると思う」「コミュニケーションを学んでいると思う」「運動技術を身につける場になっていると思う」「学校とも施設とも違う場になっていると思う」「人と協力する場になっていると思う」「子どもが戸惑う場になっていると思う」「団体行動をする力を身につける場になっていると思う」「挨拶や礼儀を学ぶ場になっていると思う」「子どもの成長が見られる場になっていると思う」「色々な人とふれ合う場になっていると思う」「子どもの楽しみの場になっていると思う」の11項目の質問項目を四件法で問い、さらに自由記述で感想を求めた。

小学生の有効回答数は23名（男子12名、女子11名）であり、職員の有効回答数は7名（男性2名、女性5名）であった。

II. グループの経過

1. 参加状況

外泊や通院、学校行事等の特別な用事がある場合や体調不良の場合を除き、ほぼ全員が毎回参加した。施設職員から参加の呼びかけを行っているため施設行事としての雰囲気が高く、ほとんどの児童が日常生活の一部として参加しているような様子であった。入退所等措置変更に伴い、参加者の入れ替わりもあった。グループが始まるという館内放送をすると、多くの子どもが走ってホールに集まり、プログラム終了後には学

生サポーターが車で施設から出るまで、全員で外に出て大声で見送ってくれた。そのような様子からは子ども達が体操教室を毎回楽しみにしていることがうかがわれた。

参加人数は2014年7月のグループ時で小学生24名（男子12名、女子12名）、幼児13名（男子5名、女子8名）が参加している。

2. セッション内容と子どもの反応

2013年4月から2014年12月までのセッションの様子を子どもの様子をTable1にまとめた。毎回、前半に体ほぐし運動に取り組み、シンプルで大きな動きを通して他者と関わる体験を取り入れた。その後、他者と協力したり競争したりし多様な動きを作る運動をおこなった。後半は、施設職員や児童らから要望の多いマット運動や鉄棒など器械体操を取り入れた。器械体操は学校体育場面で苦手になっている児童が多く、「体操教室」で体育専科の学生から分かりやすく教えてほしいというニーズが強かった。

当初は児童同士のトラブルや施設内の児童同士の対人関係の再現による葛藤などの対人トラブルを予想し、ルールや約束をよく確認した。特に器械体操は事故や怪我がないように、マットは一人ずつ使うこと、順番をきちんと守ることなど競技における注意点をよく確認し、学生サポーターが常に補助に入れる形で取り組んだ。思うように技ができずに意欲を低下させる児童や、用具の準備中にふざけてしまう児童も見られた。またじゃんけん列車など明確に勝敗がつく場面では、じゃんけんに負けてもルールに従わないなどの様子が見られた。そのため、勝敗がつく遊びを行う際には学生サポーターが児童の気持ちの代弁を行うなどの適切な感情表現を促したり、勝敗決めが遊びの中心にならない活動を中心に組み立てたり、自己表現場面では観る際の約束を確認したりする等の丁寧な取り組みが必要であった。上記のような工夫を行うことで、グループ中にトラブルや葛藤場面が表面化することは格段に減少した。児童同士が衝突しにくい形で他者と安心した交流経験や、協力経験が積み重ねられるようなプログラムの検討が必要である。

また、人間ピラミッドや新聞乗り等全員で協力することが必要なプログラムには積極的に職員の参加を促した。短時間ではあるが、職員も児童も同じ目標に向かって取り組む様子が見られた。

3. 具体的なグループワークの内容

セッションでよく取り組んだ体ほぐしの運動、多様な動きを作る運動、全員の協力が必要な活動、器械体操をそれぞれ抜粋し、具体的なセッションの様子を示す。

(1) 2人体操 (#2)：体ほぐしの運動

同じくらいの背の高さの児童同士で2人組を作らせた。2人組に分かれる際には、学生サポーターが丁寧にチェックし、ペア作りで困っているような様子が見られたらサポーターがすぐに介入するように心がけた。まず2人で「なべなべ底抜け」をし、手をつないだまま背中を合わせてしゃがみ、2人でタイミングを合わせて立つことを促した。手をつなぎ、背中を合わせたまま立つためには、息を合わせお互い背中を押し合っで支え合う必要がある。重心を相手に任せきらないと立つことができない。ペア毎にかけ声をかけたり、姿勢を少し崩し動きやすいような体勢になったりと工夫する様子が見られた。背中を押し合うためにはバランス感覚と柔軟性も必要である。中々うまく立てないペアには学生サポーターがコツを教えたり、補助を行ったりして全員が立てるようになるまで取り組んだ。職員も子どもとペアを組んで参加してもらったが、児童よりも大人の方が立つことに苦労していた。職員と子どものペアで苦戦しているペアには、他のペアの児童らが集まり、補助したりアドバイスしたりする様子も見られた。

その後2人組で押し相撲をしたり、腕を引っぱりあったり、リズムに合わせてジャンプしたり、リーダーの指示に従い2人で様々な動きを行った。ペアごとに速さを競うなど、緩やかなゲーム性を持たせながら、体のバランスをとったり、力の加減をしたりする多様な動きを行った。

(2) 大根抜き (#1)：多様な動きを作る運動

児童らに大変な人気で毎回取り入れている活動である。児童らが「大根役」となり、全員で腕を組んで輪になったままうつぶせに床に寝転び、学生サポーターと職員が大根に見立てた児童らの足を引っ張って抜くという活動である。足を引っ張られても、児童らが組んだ腕が離れなければ抜けないため、児童らは協力して一人も抜けないように歓声を上げながら取り組んでいる。その後役割を交替し、大根役となった学生サポーターと職員を児童らが引っ張って抜く。抜くほうも、抜かれる方も、短時間で大きな運動量が得られる活動性の高いプログラムである。

(3) 新聞のり (#1)：全員の協力が必要な活動

新聞を用意し、全員でそれに乗る活動である。職員と学生サポーターも入れて30名程の人数が新聞に乗ることになる。最初は十分な大きさの新聞にのり、徐々に新聞を小さくしていった。最後は3メートル四方ほどの大きさに30名で乗ることを目標とし、どのように乗るか、「作戦タイム」を設定し、児童同士で話し合いをするように促した。すると、高学年の児童が低学年の小柄な児童をおんぶする、職員や大柄な児童が新聞の端に立ち、踏ん張って内側の児童が落ちないようにするなど多様な意見が出された。新聞紙から落ちたら、サメ役の学生サポーターに食べられるという設定でゲーム性を持たせ、高揚感が出るように演出した。新聞紙の島まで通路を作り、その通路を通して順番に島に上陸した。職員も児童も笑ったり驚いたり、素直な感情表出が多く見られ、全員でギリギリ上陸し、10秒保持した後には大歓声が上がった。

(4) マット運動 (#4)：(器械)体操

学生サポーターが、前転、後転、倒立、倒立前転、側転など様々な技を見本として見せ、前転や後転のコツや難しいポイントを説明した後、児童は各自、やってみたい技を決め各自練習に取り組んだ。学年毎に5～6人のグループになり、グループで1枚のマットを順番に使用して練習した。一つのグループに1～2名の学生サポーターが補助を行った。低学年の児童やマットが苦手な児童は、前転や後転等シンプルな技を中心に取り組んだが、マット運動が得意な児童は側転や倒立等難易度の高い技に自ら取り組んでいた。そのため、難易度が高い技に取り組む児童の順番になると、多くの子どもが練習をやめ、興味を持って見守ったり応援したりした。マットが苦手な児童に対しては、学生サポーターが技術面を指導したり補助したりして取り組みやすいように配慮した。

最後に、一人一つの技を披露する発表会を行った。発表会の前には、「どんな技でも良いので全員の前で一人一回発表すること」「発表者以外は発表者に注目して応援すること」が約束としてリーダーから確認された。1年生から一人ずつ順に発表し、大技が披露されると大きな歓声が上がった。高学年女子は恥ずかしがって、前転などシンプルな技を行ったが、許容的な雰囲気を受け入れられていた。

Table1 各セッションのプログラムと参加者の様子（2014年4月～2014年12月）

#	小学生（20～25名）		幼児（10～15名）	
	プログラム内容	児童の様子	プログラム内容	児童の様子
1	準備体操 じゃんけん列車 大根抜き 宝島にのろう（新聞のり）	大きな声を出して準備体操を行った後、じゃんけん列車を行った。じゃんけんで負けても先頭を交替しない児童らが数名おり、それを指摘する児童らと言ひ合いになる場面があった。そのため、じゃんけんをする場面ではサポーターが勝敗を見守り、ルールを守っているか確認する必要がある。大根抜きは子どもに大人気のプログラムであり、大盛り上がりで取り組んだ。宝島に見立てた新聞紙に全員で乗っていく新聞乗りでは、高学年が率先して低学年の児童をだっこしたり工夫しながら、職員も児童も全員で新聞に乗った。互いに協力する一体感が感じられた。	準備体操 大根抜き しっぽ取り マット運動	歌に合わせた準備体操を行った。それぞれ歌に合わせて思い思いに身体を動かしていた。グループに入れず、部屋の隅で施設職員に抱かれていた児童が一人いたが、他児が走り回る勢いに乗せられたようで、しっぽ取りから参加した。しっぽ取りでは、紙で作ったしっぽをつけ走り回った。しっぽが取られたことに気づかない子も多かったが、とにかく走り回ることを楽しんでいた。マット運動では、一人ずつマットに背中や腹をつけ色々な方向に転がったり、手で身体を支えたりすることに取り組んだ。
2	【合同セッション】 準備体操 2人組体操 （手押し相撲、足ふみ相撲） 大根抜き マット運動	サポーターの入れ替えがあったため、児童は緊張しているようであった。2人組体操では、同じくらいの背の高さの児童同士でペアを組ませ、手押し相撲、足ふみ相撲を行った。ペア毎で競争形式にしたため、ペアで相談しながら盛り上がる様子が見られた。大根抜きはリーダーから提示をただけで、手を叩いて喜んだ。アンコールが起きたため2回取り組んだ。マット運動では、学生サポーターが様々な技を見本としてみせた後、各自目標となる技を決め、順番に練習を行った。側転やバク転など難しい技にトライする子どももあり、子ども同士応援し合う様子も見られた。	【合同セッション】 2人組体操 （手押し相撲、足ふみ相撲） 大根抜き マット運動	2人組体操は取り組みが難しく、学生サポーターと手をつないでぐるぐる回ったり、手をつないだまましゃがんだりする運動を行った。マット運動では、順番でマットに乗り、マットに背中や腹をつけ色々な方向に転がったりすることに加え、サポーターに補助されながら前転や後転に取り組む児童もいた。
3	準備体操 進化ジャンケン 大根抜き 鉄棒	進化じゃんけんでは、はじめは仲が良い子どもとじゃんけんをしていたが、次第に色々な子どもとじゃんけんするようになった。大根抜きは大変楽しみにしており、大喜びで盛り上がった。引っ張られても手を離さないよう、児童が互いに協力して取り組む様子が見られた。鉄棒は学生サポーターが見本を見せた後、それぞれが自分がしたい技を順番に練習した。鉄棒が苦手な児童は、サポーターに補助してもらい技のポイントを教えてもらっていた。鉄棒が得意な児童は、前方支持回転など連続で回る難しい技に挑戦していた。	準備体操 しっぽ取り 色々な走り方 マット運動	歌に合わせた準備体操を行った後、しっぽ取りを行った。しっぽを付けとにかく走り回って喜んでいた。その後、全員で輪になりながら、リーダーの掛け声と振りを見て様々な動きを行った。ダッシュをしたり、ゆっくり歩いたり、ケンケンバをしたり、リーダーの掛け声を聞きながら思い思いの動きをしていた。マット運動では、補助を受けながら前転と後転の練習を行った。
4	準備体操 2人組体操 （手押し相撲、足ふみ相撲） ジェスチャー伝言ゲーム 大根抜き マット運動	2人組体操では、同じくらいの背の高さの児童同士でペアを組ませるようにし手押し相撲、足ふみ相撲を行った。ジェスチャー伝言ゲームは初めての取り組みであったが、高学年女子など恥ずかしがって中々やろうとしなかった。マット運動は、学生サポーターが様々な技を見本としてみせた後、各自目標となる技を決め、順番に練習を行った。その後、一人一つ全員の前で技を披露した。1年生から順に一人ずつ発表していった。高学年女子は恥ずかしがり、前転など簡単な技を披露していたが、周囲は肯定的に受け止めているようであった。マット運動が得意な男子がバク転や側転を行うと大歓声があがっていた。	準備体操 けんけんパー しっぽ取り マット運動	歌に合わせた準備体操を行った後、ケンケンバ遊びを行った。円型のカラフルなケンケンステップを床に置き、そのステップの上を跳ぶように指示をした。年少児はケンケンをするのは難しかったが、ステップの上にジャンプしながらゴールまで移動した。その後しっぽ取り、マット運動を行った。マット運動では、前転に取り組む児童が多くなってきた。最後に一人一人発表会を行った。自分の順番になると恥ずかしがって中々できない児童もいたが、他の児童やスタッフの励ましにより発表することができた。
5	【合同セッション】 準備体操 2人組体操、4人組体操 （あんたがたどこさ） 大根抜き 天の川わたり（人間ベルトコンベアー） マット運動	七夕会ということで幼児と合同で行った。2人組体操では、2人で手をつなぎ「あんたがたどこさ」のメロディーののってジャンプしながら「さ」の部分で前や後ろに移動する運動を行った。2人、4人と人数を増やしていくと難易度が増し、苦戦しながら取り組んだ。運動量が多いため、息を切らしながらも取り組んでいた。大根抜きは大喜びで取り組んだ。児童同士抜けないように手の組み方を工夫する様子が見られた。「天の川わたり」と題して、人間ベルトコンベアーを行った。職員に協力してもらい、サポーターと職員が2列に手をつないで並び、その手の上を児童がうつぶせになって前方へ送られていくというものである。児童は初めての取り組みに戸惑いながら、大人の手から手へ跳ばされる感覚が楽しいようで大歓声をあげていた。マット運動は、各自目標となる技を決め、順番に練習した。	【合同セッション】 準備体操 2人組体操、4人組体操 （あんたがたどこさ） 大根抜き 天の川わたり（人間ベルトコンベアー） マット運動	七夕会ということで小学生と合同で行った。2人組体操、4人組体操では、学生サポーターの補助を受け、2人組、4人組を作ることではできていた。活動に取り組むことは難しく、2人や4人で飛び跳ねたり思い思いに動いていた。大根抜きは幼児のみでグループを作り輪になって寝ころんだ。足を引っ張られるとすぐにズルズルと抜けてしまいう幼児も多いが、引きずられることも楽しいようで、大騒ぎしながら取り組んでいた。人間ベルトコンベアーでは、怖がって自分からチャレンジしない幼児もいたが、小学生に抱っこされたり、励まされたりして全員取り組んだ。やってみると楽しいようで大歓声を上げていた。

6	【夏休み中：昼間屋外】 プール遊び すいか割り	夏休み企画として、週末の午後施設内のプールにてプール遊びを行った後、スイカ割りを行った。プール活動では、入念に準備体操を行った後、リーダーからプール活動中は2人組を作り、それぞれがバディとなって活動するように確認された。プールの中で鬼ごっこをしたり、宝物に見立てた水に沈む用具を集めたり、全学年が取り組めるように工夫した。その後、スイカ割りを行った。低学年から順に目隠しをし、スイカを割った。最後まで割れなかったスイカが最後の6年生で見事割れ、大歓声が起こった。全員でスイカを食べて終了した。	【すいか割りのみ小学生と合同で実施】 すいか割り	施設内プールの広さとスケジュールの関係で、幼児はスイカ割りのみの参加となった。スイカ割りでは、オモチャの剣を持ち、スイカ割りを行った。スイカに当たる幼児もいたが、スイカは全く割れなかった。その後小学生のスイカ割りを見て、スイカと一緒に食べて終了した。
7	準備体操 大根抜き キャッチングザスティック マット運動	準備体操を行い、大根抜きの提示を行っただけで大歓声が起こった。大人気の活動であり、大声をあげながら取り組んだ。その後、キャッチングザスティックという初めての活動を行った。児童10名程度が一人2本のスティックをもって輪になり、「トントンのリズムに合わせてスティックを突き、"パッ"と離して、素早く右へ横移動した。何回続けてキャッチできるか試みた。活動としての難易度も高く、グループで競い合う雰囲気を出したため、失敗した児童を叱責したり、プレッシャーをかけたりする様子が見られたため短時間で終了した。その後、マット運動を行い、学生サポーターが見本を見せた後、それぞれが自分の技を練習した。	準備体操 宝探し しっぽ取り ゴム飛び	歌に合わせた準備体操を行った後、様々な場所に隠した宝に見立てた絵カードを探す「宝探し」を行った。年少児には学生サポーターが付き添い、ヒントを出しながら行った。宝物はマットの下や間、やや高い場所などにあり、登ったりしゃがんだりしなければならぬ場所に隠した。その後しっぽ取りを行い、ゴム飛びを行った。床から15cmほどの低い位置にかけたゴムをジャンプをしたり、下をくぐったりすることを提示した。年長児はジャンプしたり、寝そべってくぐったりしていたが、年少児は意味が分からず、ゴムを避けて通る様子が見られた。
8	準備体操 猛獣狩り 大根抜き マット運動	準備体操の後、猛獣狩りを行った。全員で輪になり、その中心に猛獣役の学生サポーター数名がしゃがんで座った。全員で「猛獣狩りに行こうよ」と歌にのせた掛け声をかけ、猛獣役が児童を追いかけるという遊びである。初めての活動であったが、わかりやすく取り組みやすいため児童も楽しんで取り組んだようだった。その後、大人気の大根抜きを行った。マット運動では、学生サポーターから見本を見せた後、倒立前転や側転のポイントについて説明があった。その後それぞれが練習をした後、発表会を行った。	準備体操 宝探し しっぽ取り マット運動	歌に合わせて準備体操を行った後、宝探しを行った。年長児が多くの宝物を先に取ってしまう様子が見られたため、学生サポーターが活動中に年少児の近くに宝物を置いたり、補助したりという工夫を行った。しっぽ取りでは全員が部屋中を走り回って大歓声を上げた。その後二つのグループにわかれマット運動の練習を行った。全員が前転にチャレンジするようになった。
9	【合同セッション】 準備体操 プレゼント運びゲーム 大根抜き クリスマスツリーを作ろう（人間ピラミッド）	クリスマス会のため幼児と合同で行った。準備体操を行った後、プレゼントに見立てた箱を運ぶというゲームを行った。ゲーム性が少ないため、淡々と終了した。その後大人気の大根抜きを行った。児童からアンコールが出されたため、3度行った。最後にクリスマスツリーを作ると題し、小学生全員で人間ピラミッドを作った。土台の児童が崩れたり、上に乗る児童を選ぶのにもめめたり、時間がかなりかかったが、最後には何とか全員でピラミッドを作ることができた。	【合同セッション】 準備体操 プレゼント運びゲーム 大根抜き クリスマスツリーを作ろう（人間ピラミッド）	クリスマス会のため小学生と合同で行った。準備体操の後、プレゼント運びゲームでは、活動が理解できず、小学生に促されるまま動く様子が見られた。大根抜きは幼児のみでグループを作り取り組んだ。すぐに抜ける子も多かったが、引きずられることも楽しいようであった。人間ピラミッドは難易度が高いため、幼児は手遊びや歌を歌って過ごしたが、小学生のピラミッドづくりに時間がかかり、間延びして飽きてしまう幼児も多かった。

4. アンケート結果

全項目の記述統計をTable1にまとめた。「楽しかった」「また体操教室をしたい」「安心して参加できた」「わくわくした」「すっきりした」「協力できた」の項目平均点は3以上であり、多くの児童が楽しさや安心感、高揚感、爽快感を感じていることが示された。特に「楽しかった」という項目に関しては全員が「当てはまる」もしくは「とても当てはまる」を選択しており、楽しさは全員が強く感じていることが示された。一方で「体の動かし方が分かった」「皆に注目された」の項目に対しては、7名（30.4%）が「まったく当てはまらない」を選択したことから、体の操作性の向上や他者から注目される感じは、グループ活動で感じていない児童が相対的に多いことが示された。小学生の自由記述の内

容は、「楽しかった」「大根抜きが楽しかった」「先生にほめられました」などほとんどが楽しさに関する感想であった。

Table2 小学生によるグループ体験項目平均値および標準偏差（n=23）

	平均値	標準偏差
楽しい	3.91	0.29
またやりたい	3.78	0.67
安心して参加できた	3.65	0.71
わくわくした	3.61	0.72
すっきりした	3.43	0.90
協力できた	3.13	0.97
体の動かし方が分かった	2.83	1.30
注目された	2.78	1.35
イライラした（*）	1.35	0.83

（注）：（*）は逆転項目を示す。

職員に対するアンケート項目の記述統計をまとめたものをTable3に示す。「子どもの楽しみの場になっていると思う」「色々な人とふれ合う場になっていると思う」の2項目に関しては、回答した職員全員が「とても当てはまる」を選択した。「子どもの成長が見られる場になっていると思う」「自己表現の場になっていると思う」「学校とも施設とも違う場になっていると思う」「コミュニケーションを学んでいると思う」の4項目に関しても、全回答が「当てはまる」もしくは「とても当てはまる」を選択している。グループが様々な人との楽しい出会いの場であり、情動の喚起や自己表現、コミュニケーションを促進する場であると認識されていることが示されている。また施設内の活動でありながら、学校とも施設とも違う場になっていると認識されていることも興味深い。一方で「人と協力する場になっていると思う」「挨拶や礼儀を学ぶ場になっていると思う」の項目に関しては、「あまり当てはまらない」と感じている回答もあり、他者と協力し規律を学ぶ場としての認識は少ないことが示された。

また、職員によるグループ活動に関する自由記述を以下に抜粋する。「体操教室は子どもがストレスを発散し十分に楽しめる行事である。この場を通して人間的にも成長してほしい」「毎月楽しみにしています。身体を動かしてストレス発散できているようです」「毎回子ども達は体操教室を楽しみにしています。また職員も普段見ることのできない子ども達の姿や成長を見ることが出来る場なのでこれからもよろしくお願いします」「いつも楽しく明るく教室をしてくれ有り難く思います。元気一杯の大学生が新鮮です」「毎回楽しみにしています。学生の時間がある時には日中外でしていただけたら子どもももっと喜ぶと思います」「いつも子ども達が楽しみにしています。お兄さんやお姉さんが大好きです」「年齢に応じた体操教室となつてほしい。幼児小学生は別の方が良いかなと思います」「いつも楽しく明るく教室をしてくれ有り難く思います。元気一杯の大学生が新鮮です」以上のように、子どもが楽しんでいることを伝える内容に加え、体を動かすことがストレス発散につながっていることを指摘する内容が複数見られた。

Table3 職員によるグループ体験項目平均値および標準偏差 (n=7)

	平均値	標準偏差
楽しみの場	4.00	0.00
出会いの場	4.00	0.00
成長が見られる場	3.71	0.49
自己表現の場	3.57	0.53
施設と違う場	3.43	0.53
コミュニケーションの場	3.29	0.49
運動技術を身に付ける場	3.29	0.76
団体行動をする場	2.86	0.38
協力する場	2.57	0.53
挨拶や礼儀を身に付ける場	2.57	0.53
戸惑う場	1.57	0.53

III. 考察

本グループ実践に当たっては(1) 集団場面で安心して自分らしくいられる体験を持つこと、(2) グループで他者と協力する体験を持つこと、(3) グループで自己表現しそれを他者に受け入れられる体験を持つことを具体的目標として、入所児同士の信頼感や安心感の形成を目指して行われた。以下にグループ体験が児童にとってどのような体験であったのか、グループの目標に対応して考察する。

グループにおける児童の様子や参加者や職員に対するアンケート結果からは、グループが楽しい活動であり安心していられる場所であることが明らかになった。活動によりわくわくドキドキする高揚感や、体を動かしてスッキリするという爽快感も示された。グループが様々な人との楽しい出会いの場であり、情動の喚起や自己表現、コミュニケーションを促進する場であると認識されていることが分かる。また、施設職員からはグループが「学校とも施設とも違う場所である」という指摘も見られる。一方で、運動技術を学んだり規律や礼儀を守る場という認識は低く、グループを運動技術や競技を習得したり他者と協力したりする場所としての認識は低かった。

上記グループ目標に対応して考えると、「(1) 集団で自分らしくいられる」という目標はある程度達成されていたと考えられる。しかしながら、(2) (3) にあたる他者と協力したり、自己表現し注目されるという体験を持つには不十分であったと考えられる。プログラムや活動の提示の仕方に工夫が必要である。

子どもに対する集団精神療法の先駆者であるスラヴソン (Slavson, S.R.) は、「活動集団療法」を提唱した。スラヴソン (1956) は活動の内容のみが治療的な意味を持つのではなく、集団内の仲間とのさまざまなやりとりや集団そのものが治療的に有用であるとしてい

る。本実践においても、児童にとって活動の内容のみが重要であったのではなく、集団メンバーである児童や職員、学生サポーターとの様々な相互のやりとりが重要であったと考えられる。児童は楽しい活動の中で、集団の中で互いに張り合ったり、やきもちをやいたり、助けたり助けられたり、協力し合ったり、そして学生サポーターや職員、年長児に甘えたりと様々な体験をする。集団の責任者であるリーダーは、集団を乱す行動を制限することはあるが、学校における教師のように叱ったり評価したりせず、基本的に許容的であり、子どもの甘えを受け入れ、子ども一人一人の承認されたい気持ちをくみ取るように心がけた。このような過程で得られたグループ活動は、現実でありながら、日常生活とは大きく異なる空間となり得る。児童らはグループで、他者との新しい関係性を経験したのではないかと推測される。それゆえ施設内での入所児同士の活動でありながら「学校とも施設とも違う場になっている」と捉えられたと考えられる。

次に発達の観点から活動内容や枠組みについて検討する。本実践は幼児から小学6年生という幅広い年齢層を対象に行った。自由参加のオープン形式で行ったため、毎回ほぼ全員が参加し、小学生は20名程度、幼児は10名程度がそれぞれグループ活動を行った。また、プログラムや場所の都合により適宜幼児から小学6年生まで30名程度全員でグループワークを行った。小学生は体づくり運動を中心に、ゲーム性を取り入れながらも多様な動きの経験が可能になるように心がけた。一方で幼児は歌や絵カードなども用いながら、楽しい雰囲気の中のびのびと手足を動かしたり、力いっぱい動いたりする体験を重視した。宮内ら（1987）は子どもの集団精神療法是発達段階に相応したやり方があり、幼児や低学年児童には遊びを中心とした遊戯集団療法、学童期の子どもには工作やスポーツ、ゲームを媒体にした活動集団精神療法が有効であることを指摘している。本実践における活動内容は宮内（1987）の指摘する発達段階を踏まえたものとしても妥当であったと考えられる。体づくり運動のようにシンプルな身体活動を通じ、自己身体感覚に注目し、ゲーム性のある遊びを通して他者と関わりあう体験は小学生のグループワークの内容として有効であると言える。安全な形で自己身体に関心を持ち、体を動かす楽しさや心地よさをじっくりと体験することにより、自己の感情や心的状況を推測しようとする構えが形成されていくと考えられる。一方で、グループサイズやプログラム内容については検討が必要である。本実践では小学

生と幼児を合同で活動することも多くあった。小学生が幼児の成長を褒めたり、気にかけて励ましたりする様子や、幼児が小学生の真似をしたり、小学生に甘えたりする様子もよく見られた。楽しい雰囲気の中で異年齢集団を形成するという意味では一定の意味があったと考えられる。しかしながら、合同セッションではプログラム内容が幼児にとって難しかったり、互いのテンポに差があったりということもよく見られた。幅広い年齢での活動にも意味はあるが、年齢や性別で遊び方や興味の持ち方も大きく異なることを考えると、より近い年齢や同性の小集団活動を取り入れることも有効であろう。宮内ら（1987）は集団を構成する人数は4～8人が適当であり、10人あるいはそれ以上になると集団は扱いにくくなることを指摘している。本実践では学生サポーターが毎回10名程度コリーダーとして参加し、小学生20名程度、幼児10名程度が活動を共有した。合同セッションでは学生、職員も合わせ50名程度の集団となった。大きな反応が得られるため、集団としての活動が賦活化されるという側面もあるが、より一人一人の主張や反応を丁寧にサポートするためにはグループサイズの検討が必要であろう。

最後に、児童養護施設で行うグループワークの意義と課題について検討する。前述したように、大人の許容的な見守りがある中で行うグループワークでは、児童は楽しい活動を共有し、集団メンバーによる相互作用を通して様々な情動を経験する。本実践で行った活動内容は、心的外傷等からの回復を促すアプローチや自身の問題性や課題に向き合っていくような活動ではない。のびのびとした動作を行いながら、自分自身の体を調整し、心地よさを体験していく体験をねらったものである。極めてシンプルな活動内容ではあるが、身体を大きく動かすことにより、本来児童が持つ成長へと向かう力や主体性や能動性を活性化させるのではないかと考えられる。そのような体験の積み重ねが入所児の安定的な対人関係性の発達につながると考えられる。また、施設コミュニティという観点から、施設内でのグループワークの意義について検討する。本実践は施設内での活動であり、メンバーも普段から一緒に生活をしている集団である。児童が生活を行う場所であるからこそ、その生活の場で、様々な水準のコミュニティを形成することが重要である。即ち、子ども同士あるいは子どもと職員、子どもと学生サポーター等、様々な水準で安心できる繋がりを深めていくことにより、施設内の人間関係全体を安心感の強い関係へとしていけるのではないだろうか。そのような施設内

の安心感の育成こそが、入所児の支援の土台として重要であると考えられる。

最後に課題について述べたい。本実践において、ルールが複雑なプログラムや、競争要素が強いプログラムを行った際には、児童同士が互いにプレッシャーをかけあったり、ルールを破ろうとしたり、用具を持ち出そうとしたり、対応に苦慮する場面も多かった。活動の内容や提示の仕方によっては、児童同士が衝突してしまう危うさが常に感じられた。プログラム内容の検討は必須である。グループのサイズや枠組みの検討を進め、プログラム内容や進行の仕方、グループにおける支援の仕方やサポーターの育成、長期的な視点での子どもの育ちへの影響の検討など、さらなる実践と研究が必要である。

IV. 引用文献

- 1) 厚生労働省 (2013): 社会的養護の現状について (参考資料) http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/syakaiteki_yougo/dl/yougo_genjou_01.pdf (平成26年11月21日16:35入手)
- 2) 浜田雄久 (2003): JaSPCAN虐待に関する制度検討委員会による「児童養護施設における処遇困難児等の対応に関する実態調査報告」の概要. 子どもの虐待とネグレクト, Vol.5, No.1, 106-108.
- 3) 鎌田道彦・駒込勝利 (2008): 児童養護施設職員へのインタビュー調査からみた集団処遇に関する悩みについて. 仁愛大学研究紀要, 7, 15-23.
- 4) 森田展彰・有蘭博子・肥田明日香・末次幸子・黒田直明・林志光・鈴木志穂・中屋淑 (2003): 児童養護施設における思春期児童を対象としたグループワーク. 子どもの虐待とネグレクト, Vol.5, No.1, 185-198.
- 5) 飛永佳代 (2009): 思春期児童養護施設入所児童の相互信頼感形成を目指した動作法によるグループアプローチの試み. リハビリテーション心理学研究, 36 (1), 1-14.
- 6) 村澤和多里・木村香文 (2011): 児童養護施設におけるグループワークの試み. 作大論集, (1), 227-238.
- 7) 山根隆宏・中植満美子 (2013): 性問題行動のある児童養護施設入所児童への手段心理療法の効果. 心理臨床学研究, 31 (4), 651-662.
- 8) 文部科学省 (2008): 小学校学習指導要領解説体育編平成20年8月, 7版, 東洋館出版pp5-8.
- 9) 文部科学省 (2013): 学校体育実技指導資料第7集 体づくり運動-授業の考え方とすすめ方— (改訂版), 東洋館出版, pp6-19.
- 10) スラヴソン, S.R. (小川太郎・山根清道共訳) (1956): 集団心理療法入門, 誠信書房. (Slavson, S.R. (1943): An Introduction to Group Therapy, The Commonwealth fund, New York).
- 11) 宮内和瑞子・藤岡邦子・川田行雄 (1987): 児童の集団精神療法 やさしい集団精神療法入門 山口隆・増野肇・中川賢幸編著, 星和書店, pp321-342.

Received date 2015年1月7日